世相を斬る！

ジャーナリスト **斎藤貴男** 〈最終回〉

連載の締めくくりは、「どこに展望を見い出すか」で、と編集部からお題をいただきました。でも現状では、これが実に難しい。昨年末の総選挙や、その後の政治情勢を考えると、ほとんど絶望的な気分を禁じ得ないからです。

多くの人々に共通する思いではないでしょうか。でも諦めたらオシマイです。たとえばジャーナリストの辺見庸さんは、こんなことを言っています。

「絶望と希望の境をどこに見つけるか。『絶望之為虚妄、正与希望相同！』」

後段は魯迅の引用ですね。絶望は虚妄だ、希望がそうであるように――（佐高信氏との対談本『絶望という抵抗』金曜日）。

「政治的なものはもう触れるのもいや」だと話しているのは、作家の高村薫さんです。鋭い権力批判にも定評のある彼女が新作でコメディーを手がけた理由だそうですが、ジャンルはどうあれ、逃げ出すような方ではありません。続く言葉に思わず膝を叩きました。

「希望のなさをエネルギーに変えるような忍耐と、人間として生きることへの誠実さを捨てないよう、私たち大人が何とかせないかんですね。そういうふうに若い人に語っていかなければ」（『東京新聞』1月17日付夕刊）

私もまた、安易な楽観論には立ちたくありません。絶望と正対し、これを突き抜けんとする営みによってしか展望など開けやしない、と。要はおふたりとほぼ同じ発想です。

絶望と正対し、突き抜けんとする営みによってしか展望は開けない

残りの人生をこの時代状況への抵抗を貫き続けることで完結させるつもりです。カッコイイ人間賛歌も書いてみたかったのですが、ここまで来てしまったら、ジャーナリズム本来の「権力のチェック機能」になりきるしかないようです。

同時に、自分を少しでも高めたい。仕事量をセーブしてでも、本を読みまくろうと思います。トマ・ピケティ『21世紀の資本』のような話題の書だけでなく、トルストイの『戦争と平和』とか、五味川純平の『戦争と人間』とかも。なにしろ相手はあまりに乱暴で、軽々しく、どチンピラ丸出しの連中ばかりなので、対症療法的に抵抗しているだけでは、こちらの人間性も怪しくなりますからね。

安倍晋三政権に対する地方の不満には相当のものがあります。とりわけ消費税増税とTPPへの怒りはものすごい。取材や講演で各地を回るたびに感じてはいましたが、沖縄や佐賀の県知事選で明白になりました。

これはこれで「展望」の原動力になり得ます。ただ、同じ有権者たちが、国政選挙だとあのような結果を招いている現実も否定できません。地域社会のしがらみか、せめてもの利益誘導を求める心理なのか、いずれにしても、このあたりのギャップを埋めていく闘いは、長く、苦しいものになることでしょう。

根を詰め過ぎれば心身ともに壊れます。安倍政権ごときに命をすり減らされてはたまりません。抜くべき時は抜く姿勢も必要だと、私は自分自身に言い聞かせてもいます。

1年間のご愛読を感謝します。またの機会にお目にかかりましょう。

さいとう たかお／1958年生まれ。『機会不平等』（文春文庫）、『ルポ改憲潮流』（岩波新書）、『民主主義はいかにして劣化するか』（ベスト新書）、『民意のつくられかた』（岩波現代文庫）ほか著書多数。

Photo=SONOBE Hideo